

『第8回 地域に飛び出す公務員を応援する首長連合サミット in 岐阜』

【地域に飛び出す公務員アワード2018 招待者プレゼン】

司会（佐賀県小城市職員 坂田啓子）：

全国 330 万人の様々な立場の公務員が、日頃から地域に飛び出して活動している。これを後押しする為、2013 年から「地域に飛び出す公務員アワード」を実施。今回で 4 回目となるアワードには 25 組の応募があり、この中から首長連合加盟首長が選んだ、「この人の話を聞きたい」という 5 組の方々をサミットに招待した。

（1）「地元の戦国武将を通じて地域活性化を！」 筒井加奈さん（高知県）

地元の戦国武将とは、長宗我部元親をはじめとする長宗我部一族のこと。高知県といえばどうしても坂本龍馬というイメージがあるが、戦国バサラや戦国無双というゲームでも人気の武将。歴史好きの方は司馬遼太郎先生の『夏草の賦』でご存じかと思う。

私は、歴史の偉人を地域にとって大切な資産だと思っていて、それを何とか活用して高知県を盛り上げていく活動ができないかと考え、長宗我部会というグループに入会した。長宗我部会は、長宗我部氏の顕彰を目的に、関連イベントへの参画や、自主企画の開催をしている。大河ドラマ化の署名活動、史跡の勉強会、地元の長宗我部まつりや長宗我部フェスにブース出展、イベントを担当させてもらうなど。コスプレイベントをやった時に自分達も盛り上げようということで、衣装は全部私の手作り。活動資金が会費しかなかったので、自分でアクセサリを作って売った。今年一番大きい事業としては、よさこいチームを立ち上げた。音楽を出す地方車（じかたしゃ）にいろいろ装飾して、音楽を流しながら町を歩いて、そのあとに踊り子がいる。私も踊り子として参加した。

ここで、公務員の仕事がこの活動に生かされた事例を紹介したい。会計処理を間違った方法でやっていたので、3 年前に事務局長に就任してから改善した。総会資料や会議の議事録など、当たり前で作るべきものが作成されていなかったので作成するようにした。それから、とにかく資金がなかったので、いろいろ調べて高知市のまちづくりファンドに応募してとりあえずの資金を確保した。ただ、仕事で補助金の担当もしたことがあるが、補助金が終わったら活動が終わってしまうというのが多い。そうはしたくないので、計画の時には何か継続につながるような、資産になるような計画を意識した。また、事業の段取りとして、公務員はイベントをする前にマニュアルや準備物一覧を作成したり、スタッフ会議をやると思う。そういうものが全然されていなかったの、やるようにした。

次に、長宗我部会での担当が公務員としての仕事に生かされた事例。今年よさこいチーム立ち上げに関して、資金を集めるのにクラウドファンディングに取り組んだ。今、県庁の地産地消・外商課にいるが、事業者の方がクラウドファンディングに取り組みたいよという時に、自分の経験から、クラウドファンディングとはこういう感じですかみたいな事を言えるようになった。長宗我部会でツイッターやフェイスブックをやっているが、それぞれ反応が違う。ツイッターでこういう情報を発信したら反応がいいなとか、こっちはフェイスブックの方が反応がいいなというのが分かっているので、仕事で SNS に書き込みをする時にすぐ役に立っている。

私は県庁職員なので県民の方と直接接する部署にあまり行ったことがなかった。長宗我部会で、実際に

市民の方と一緒に事業を進めていく中で結構びっくりしたのが、会議で決めたことがすぐ覆ったり、全然メールを見てない、全然メールを理解していないということがあった。それを念頭に置きながらの仕事というのが出来るようになったと思う。

長宗我部会の活動を通して、マスコミへの情報提供や発信の大変さがすごく分かった。県庁であれば記者室があるので、そこに投げ込めばそれで終わりだが、全然そういうのがないので自分で新聞社に行ったり、名刺交換してもらって、その人とにかくメールを送ったり、そういう風に伝えるようになった。

私は人とあまり関わり合いたくない人間だったが、活動する中で人とのつながりが一番大事だと分かった。そこで考えを変えて、なるべく人とつながって、そのつながりを大事にしていくようになった。

今感じている課題もある。私がいつまでも事務局長をできないし、それは会の発展に繋がらないと思う。ただどうしても Excel、Word、PowerPoint を使って資料作成できる人が意外に少ない。気が付いたら自分がやり過ぎていた。そこで今年の春から部会制に移行して、極力仕事を部会長に振っているが、なかなか上手く回っていない。自分でやった方が早い、そこは敢えて我慢して任せるということで、何とかやっている。

事務局長に就任してから会員が 2 倍以上に増えた。それによって私に非常に負担が掛かってきた。2 歳の子がいるので、家族に迷惑を掛けているなあということを実際に申し訳なく思っている。

困っているのは、どうしても年休の残数が少なくなってくる。今の職場は結構理解があって、ラジオの収録に行く時など快く送り出してくれる。ただ、特に行政が主催するイベントの実行委員会や説明会はどうしても昼間に行われるので、それに代表として行く時には有休を取得しなくてはならない。有休の取得数が少ないイコール仕事している、できる職員というイメージがあって、こいつ仕事してないんじゃないかと思われるのが、自分の今の心配事。できたら年間 3 日程度、地域活動を行う為の特別休暇があったり、人事に悪い影響が出ないように人事ヒアリングの様式に地域活動の欄があって、こういう活動してますよと事前に言えたりしたら、もう少し気持ち的に楽になると思う。会議はできれば平日の夜間に設定、説明会は昼夜 2 回開催にさせていただけたらありがたい。私も行政の人間だが、行政の方にはちょっとお願いしたいかなと思っている。

司会（滋賀県湖南市長 谷畑英吾）：

仕事が地域活動に活かされる。まさにこれは地域に飛び出す公務員のその成果。また、地域活動が仕事に活かされるというのは、県庁職員は、おっしゃるように地域とのつながりが極めて少ないので、非常に良い経験しておられるなと感じた。有休の数が少ないというのは、これから働き方改革も入ってくるので、全体として考えを改めていく必要があるだろうと思う。そういったこともまたこの首長連合の中でいろいろと議論していければということで、良い指摘を頂けたと思う。

（２）「福井市提案型勉強会！」西澤公太さん（福井県福井市）

今日お話ししたいことは 3 つ。提案型勉強会とは何でしょう、活動内容、そして自分で自慢するしかないかなというところで、「ここがすごいぞ！提案型勉強会」という 3 つをご紹介させていただきたい。

まず提案型勉強会とは、地域にまちの可能性を提案する福井市役所職員を中心としたグループ。もとも

とは本を読んで知識を高めるような活動をしていたが、それだけで地域が変わるわけではないことに気付いた。それで、「仕事でも趣味でもない、人生と仕事を豊かにする活動」を継続すると、何か地域が変わっていくのではないかと。勉強会で知識を得て、じゃあどうするのかというところを大事にしたいと思い、提案型勉強会という名前に変えた。本を読むだけでは現実には変わらない。まちへダイブしようということで、なるべく地域に飛び出すようなことをしている。

市役所職員ができることは何か、我々の中では3つある。業務でのインプットをまちの将来に投資すること、投資された結果を業務の改善に少しでも生かすということ、そして答えのない問いに市民と一緒に悩むこと。地域の課題はすぐに答えが出るものばかりではない。ただ市民の方にとっては、それこそ一緒に悩んでくれるだけでかなり力が湧いてくるというところがあるので、悩むだけでもいいんじゃないかと思う。

活動内容としては、先程椎川理事長もおっしゃった地域イノベーション、地域リノベーション、飛び出す公務員の仲間作りを行っている。

まず、地域イノベーション、「チームモアイ」と「アゴリズムプロジェクト」について。イースター島のモアイ像をモチーフにした「チームモアイ」を結成。これは、安居地区の青年団の人たち、地元の新聞のグループ、我々市役所職員の有志グループ、この3つのグループが合わさったもの。福井県福井市の安居（あご）地区で活動している。安居地区なので当然「あご」、「あご」と言えば「モアイ」ということで、中学生の子達が考えてくれた。ちなみにこのチームモアイのTシャツは、中学生の美術の先生がデザインしてくれたもの。安居地区にリズムをつけるといふ狙いから、「アゴリズム」。地域の伝統「あぶらげめし」というごはんや地区の魅力を地区の内外にPRする。あとは地区の将来を担う子供たちが地区のいいところに気づきやすくするための商品の試食販売、スタンプラリーのイベントなどを行っている。

モアイ像をみんなで一生懸命作って、地域のいたるところに置いて、クイズ形式にして地元を回るイベントをやった。自分のまちに昔から伝わるグルメ、おばあちゃん・おじいちゃんの時には作っていたけど、私は食べたことがないというものを女性部の人たちと話し合っ、子どもたちが食べたいと思うような味付けにアレンジした。地域の活動は華やかなものばかりではない。たとえばゴミ拾いや、どぶさらいなど地道な活動もある。そこで、モアイポイントカードを作り、そこに参加するとポイントを押してもらって、それが夏祭りの割引に使えとか、そういう活動で地元新聞の取材も受けた。

続いて地域リノベーションについて。空き家や空き地が問題であることは市の職員も含めてみんな分かっていると思うが、じゃあ自分事になっているのかというと、まだまだ他人事になっているのが現状。空き家予備軍を計画的に何かしたいということで、自分事になって空き家を活用する体験を試みようという空き家マッチングスクールを開いている。関係しているのは不動産関係者、大学生、寮生関係者。内容としては講演会とグループワーク。グループワークでは、市役所の職員が自分の家はこんな現状だということで、おじいちゃん、おばあちゃんが死んじゃったし、もうどうすればいいのかわからないということを赤裸々に話す。それに対して業者の皆様がプレゼンしていく。

最後に、飛び出す公務員の仲間づくりについて。「公務員と公務員を語る in 福井」を昨年からはじめた。公務員になる為の勉強は一生懸命やると思うが、そのあとどう公務員としてキャリアを積み重ねていくのか。たとえば人事課からきた研修をただ受けるだけでなく、それが自分のライフプランを豊かにするということをもっと腹落ちするようになってほしいと思い、学生達を対象にして開催している。福井県下の職員に集まっ

ていただき、リアルな公務員像を話していただいた。理想の公務員というものをいつもテーマにしている。何を目指して公務員になったのか、ちょっと綺麗ごとかもしれないが、これが長期的に公務員を続けていくには非常に大事なことだということを市役所に入る前から分かっているのと分かっていないのでは随分違うと感じている。参加者の声としては、「自分の中の公務員像が整理できました」「公式の集まりに比べ、訊きづらい質問が出来てよかったです」などがあつた。

まとめとして、「ここがすごいぞ！提案型勉強会」ということで、とにかくやってみて考えましようということ。福井市だけでなく他の自治体職員も参加するということも強み。我々フェイスブックのグループも持っているので、業務改善のアイデアについて常に情報交換している。とは言ってもまだまだ悩みも多い。メンバーのモチベーションにも差があること、私も含めて、小さい子供がいるメンバーも多い。それをどう時間を作って参加するかということで、独身の時にはバンバン参加できていたのが、どうしても家庭を持つとちょっとブレーキが掛かってしまったりとか、その狭間で揺れ動いたりしている職員もたくさんいる。業務に具体的に生かされた、役立てた実績がまだまだ少ないので、これらが改善事項だと思っている。

今日ご来場されている皆様と、これからは是非たくさん意見交換させていただいて、飛び出す公務員と地域が輝くような社会を作っていきたい。

司会（滋賀県湖南市長 谷畑英吾）：

いくつか素晴らしいタームがあつたと思う。市民とともに悩むだけでもいいんだということ。今、行政に求められるのは、相談ということが非常に多くなってきている。公務員の持っているスキル、それを地域で使っていくことに繋げていく為には、悩むということも大事ななと思った。

家庭との両立、地域活動との両立、これはこれからの課題だと思う。働き方改革もあるが、家庭は大事にしていきたい。外で活動する為のエネルギー源として、家庭では平身低頭していただければありがたい。

（3）「須磨ユニバーサルビーチプロジェクトを全国に広める」秋田大介さん（兵庫県神戸市）

神戸市都市計画課で、土木技術職員として働いている。神戸の中心・三宮駅前地区の大規模な再整備の方針を決める過程で、300人単位のワークショップを3回くらいやった。最大の目玉は、10～8車線の車道を全部やめて広場にするというのを打ち出し、結構な衝撃を全国に与えた。その都心三宮のビジョンをSNSで広めていこうということで「1000スマイルプロジェクト」を作った。1000人分の神戸市民の動画を撮って、皆さんに都心三宮のことを熱く語ってもらった。これがたくさんの方と繋がるきっかけになった。

最近、通り名で呼ばれている。ストリートダンスやっていたので、踊る公務員。何かちょっと変わってるということで変態公務員。役所に飼われてないということで野良猫公務員など。普通の公務員より親しみやすい感覚を持たれているようで、実際市民の方がかなりたくさん相談に来る。一例を挙げると、まちのど真ん中でキャンプがしたい、壁画を描きたい、「クリエイティブな子供が育つまち」にしたい、子供に料理を教えたいなど、多種多様。企画を聴いて、行政が組みやすいような切り口の企画書にして、実際に担当する部署の面白い公務員さんにうまく繋ぐことで少しずつ実現していくようにした。すると実際に相談した人が進捗をどんどんSNSに上げてくるので、相談者がどんどん出てきて、最近は週一くらいでいろんな企画の相談が

るという状態。まちなかのキャンプは、防災の企画に絡めてキャンプをしながら子供に防災を覚えてもらおうということで実現した。三宮の周辺にはたくさん壁画が入るようになった。

車椅子で海に近づきたいという企画を持ってきたのがきっかけで、須磨ユニバーサルビーチプロジェクトに繋がった。僕らの NPO の合言葉は「できないをできたに変える」。神戸には須磨海浜公園という大きなビーチがあり、車椅子ユーザーさんでもビーチを楽しめるようにしようということで始まった取り組み。日本全国のビーチは、バリアフリー設計はしていて、ビーチまでは行けるが、波打ち際まで行けない。なぜかという、砂浜があるから。砂浜に車椅子が入ると止まってしまうのでどうしても行けない。オーストラリアでは、ビーチアクセスマットという特殊なマットを敷いて車椅子で砂浜を自走できる。さらに海に入れる車椅子が用意されている。NPO 代表の木戸が実際にこれを見て感動して、何とか日本に持っていきたくて、海の家の方に相談して、海の家から僕のところに相談が来た。マットはアメリカ製で非常に値段が高い。これをクラウドファンディングで資金を集めて購入した。これで車椅子の方も波打ち際まで行って波を触ることができる。波を触れたら、やっぱり海に入りたいと思うだろう。そこで、ヒポキャンプというフランス製の水陸両用アウトドア車椅子を数名の有志の借金で一台購入した。車椅子のまま特別なライフジャケットを着て海に入る。浮力があるので、ライフジャケットで海に浮ける状態にして、あとは車椅子を抜いてしまえば海水浴ができる。だから誰でも、首の下が動かない方、人工呼吸器付けている方でも頑張ればできるというので、ここに来たら全員海に入る。たとえば二人兄弟の家族でお兄ちゃんが車椅子の場合、家族旅行を計画するときに海水浴に行くという選択肢がない。今回そういった家族が初めて旅行を計画して来てくれた、家族 4 人で初めて海に入るという経験ができた。また、たまたま視察に来ていた家族がいて、水着は持っていないけど子どもを海に入れてあげたそうだったので、ぜひ入りましょうと提案した。お母さんが着替えはあるから入れて下さいということで海に入れた。その子のすごく嬉しそうな様子を見て、お父さんは思わずそのままの服で飛び込んでしまった。その瞬間のその子の笑顔がめちゃくちゃ素敵だった。こういう非常にいい体験ができるようになった。他にも、昔は健常者で、今ちょっと障がいを負った方でも久しぶりに海に入ったということで、すごくいいチャレンジの場が出来上がっている。一緒に海を楽しめる。ビーチの一角が笑い声だらけになっていて、それを見てだんだん人が集まって来て、どんどんみんなおせっかいを焼いて行って、車椅子の人を勝手に呼んで来て海に近づけていく。みんな海を楽しむ状態になった。ハード整備を海までやるのは、簡単かもしれないが、本当のユニバーサルではない。おせっかいも含めて一緒に楽しむというのが本当のユニバーサルだろうと、この経験から僕らは考えさせられた。

公務員である自分の役割は、海・道路・公園の管理者との調整や、資金調達の情報提供など。また、行政の職員が入っていることで安心してもらえるし、人材ネットワークが活用できる。先ほど紹介した 1000 スマイルプロジェクトでたくさんの方と繋がっていたので、この NPO でもたくさんの方が手伝いに来てくれた。

神戸市職員としてのメリットは、国際認証を取ろうと思っている須磨の海をうまく P R できること、本物のユニバーサルデザインの啓発ができること。今後の人口減少の中で、障がい者はもっと戦力になっていかないといけないと考えているので、こういったチャレンジができる場や機会によって障がい者がどんどん社会に出ていくこと。NPO 代表の木戸のような神戸の市民活動家の活性化に繋がるということ。そして最後に、とにかく面白いということ。

今後の展開はフィールドを広げること。海だけでなく、畑で枝豆の収穫体験、山登り、そしてこれはかなりハードルが高いが車椅子の子に木登りをしてもらおう。神社の玉砂利にも行けるようにする。スキーもやる。パラグライダーもやってみたい。みんなでわいわいとユニバーサルなキャンプをしたい。最近では地引網と一緒にやったりと、フィールドをどんどん展開していくことにしている。もう一つは横展開として、全国でこういうことをやりたい。僕らがすべてをやる必要はなくて、全国でやってもらうところをたくさん見つけて、一緒に組む。すでにいくつかのビーチとは組んでいて、ビーチマットを持って現地に行って一緒にやる。全国の海とか山とか、いろんなフィールドが障がい者の方にとって面白い場所であればいいと思う。今日のこの発表でいろんなところと繋がって、全国の皆さんと一緒に、面白い取り組みを増やしたい。

司会（滋賀県湖南市長 谷畑英吾）：

踊る変態野良猫ということだが、湖南市では「こにゃん市」という取り組みをしていて、殺処分ゼロを目指している。殺されそうになったら是非湖南市の方に来ていただきたい。旭川のカムイ大雪バリアフリーツアーセンターでも同じようなことをしている。車椅子であっても雪山の中でスポーツを楽しみたい、雪まつりをしたい、何でもやりたいということで、まちなかにどんどん出て行く。バリアフリーというのは、人がそれを支えること。車椅子の人の為に低いところにボタンを置くのではなくて、来た人がきちんとそれをサポートすればいい、そのような動きもたくさんある。先程言われたようにたくさんの方と繋がっていただくと、どんどん展開が広がっていく。やはり我々の仕事は相談を受けること、そして、それを企画化して繋いでいくことが非常に大事だと思う。

（４）「街をサンタでいっぱい！病氣と闘う子供たちへプレゼントを贈る」小野寺達弥さん（北海道更別村）

北海道十勝の更別村から来た。発表テーマが街をサンタでいっぱいということで、サンタ衣装を着てきた。この姿では怒られるかもとドキドキしていたが、このサンタクロース姿のままで説明したい。

元々民間企業出身で U ターンして北海道に戻ったが、街中のシャッターが下りて閑散とし寂しいため、少しでも元気になれることがないか考えていた。また滞納者の徴収業務を担当する中で、家庭環境の様々な問題や育児放棄などを深刻に感じ、そういった子どもたちに少しでも力になれないかと考えていた。そんな時に札幌の知人から、サンタランというイベントをやるので出てみないかという誘いがあった。

私自身が母子家庭で育ち、クリスマスを楽しんだ記憶がほとんどなく寂しい想いがあったため、サンタランをやるなら自分でやってしまえということがキッカケとなる。

サンタランは、世界各国で開催されるチャリティで、日本では大阪が最初に開催した。現在では、北は北海道、南は沖縄、全国では 20 か所くらいで実施している。クリスマスと言えば雪、雪と言えば北海道をイメージするため北海道にぴったりのイベントだと考え、北海道全体に広めようと進めてきた。去年までに、私がやっている十勝のほか、札幌、広尾、函館、旭川、富良野、稚内の 7 地区で開催している。

サンタランは、病氣や家庭環境などの理由で、クリスマスを楽しめない子どもたちにプレゼントを贈るという取り組み。十勝では、行政からの補助金は一切受けず、参加費と協賛企業の寄付だけで運営している。行政から補助金をもらってしまうと、それに頼ってしまうので、補助金には頼らないことを基本としている。

難病等の子どもたちにプレゼントを贈ると本当に喜んでくれる。参加者自身も楽しんで参加してくれる。ま

た街に真っ赤なサンタクロースが溢れることで華やかになる。100 人以上のサンタが街を歩き、約 1 時間で 30 万程の買い物をするので売上も上がり街も元気にする。この目的で活動し 6 年目を迎える。イベント当日は、受付後に参加者全員でサンタに着替え、写真を撮り合い SNS で広める。去年は約 100 人が参加し、コカ・コーラやスターバックスなどの企業から協力を得て飲み物を提供されている。また、地元グループの協力で 30 分程度ゴスペルライブを行い、参加者全員で歌を歌って楽しむ。開会式が終わったら、全員で記念撮影の後、いよいよ街へ繰り出す。北海道では、雪や路面凍結で危ないので、ゆっくりと歩く。みんなで歌を歌ったり音楽を鳴らしたり、中には自分でお菓子を用意して歩いている子どもたちにお菓子を渡す参加者もいる。とにかく参加者全員で楽しみながら街を歩く。

デパートに到着すると、参加者全員でプレゼントを買う。これは日本で唯一の十勝方式であるが、最初、デパートと打ち合わせた時には、一般のお客様に迷惑になるから絶対ダメだと断られた。しかしながらデパートの中がサンタだらけになって華やかになって、しかも売上も上がると 3 回、4 回と打合せを重ねて、この方式を進めることができた。プレゼントを買い終わったら、早く元気になってということメッセージカードに書いてもらい、そのプレゼントを参加者全員で届けに行く。地元の十勝バスの協力も得て 1 台が病院関係、もう 1 台が児童養護施設に走っていく。バスもクリスマス仕様となり、全員で楽しみながら移動する。

病院でも、最初は感染症の問題もあり、そんなのダメだ、けしからんと断られた。何度も病院と協議し、最終的には施設に入る前に手を消毒し全員必ずマスクを付けるという条件により実施した。最近では病院も非常に理解を示し、全員で記念撮影したり、歩けない子どもたちについては、病室まで行って直接プレゼントを渡すことも可能になった。児童養護施設では、子どもたちにお菓子をプレゼントしている。

この取り組みは、日本で唯一の方法ということで非常に注目をされ、2 年前にはミスターサンデーというテレビ番組からも密着取材を受けている。

去年は、約 140 人の子どもたちにプレゼントを贈った。児童養護施設に行くと 3 歳、4 歳くらいの子もたちが、みんなでワッと寄って来て私の手をギュッと握る。それを見ているだけでも日頃から寂しい想いをしていると感じた。病院でも、何年も入院してクリスマスやったことないという難病の子は、親も病室で待っていて、涙ながらに喜んでくれるため、私もつい一緒に泣いてしまう。本当に優しくなるイベントである。

プレゼントを贈呈してイベントは終了するが、最後に参加者同士で交流会も開催する。

最後になるが、この取り組みが実現できたのは、私自身が民間を経験したこと、そして様々な人と出会い交流して、信頼関係を構築できたのが良かったと思う。また最も重要なのは、やれば出来る、何事も諦めないということ。その強い熱意があったから 6 年間も継続できたと思う。新しいことをやるのは本当に大変でエネルギーを使う。私自身も嫌な経験をしたが、地域に飛び出して、様々な人と共に成功できれば素晴らしい経験になる。もしこの話を聞いて共感された方がいれば、是非新しいことに挑戦してほしい。

司会（滋賀県湖南市長 谷畑英吾）：

私が話を聞きたいとオファーをさせていただいた。素晴らしい取り組みだと思う。別にそんな格好で怒る人はいない。むしろ、役場でもその格好で仕事をしていただくと余計にいいのかなと思う。湖南市の隣の甲賀市では 2 月 22 日ニンニンンの日には忍者の格好で職員が仕事をしている。この人気の中でサンタの故郷という形で、夏でもその格好でいけば、またテレビが注目して来るのではないか。

(5)「静岡の自治会組織を第三者視点で支援「里山くらし LABO」 河村将雄さん（静岡県）」

平成 11 年に静岡県庁入庁、農業土木職という技術職で、仕事はずっと定年まで農村支援。今は、IoT 技術を使って水田の水管理を自動で行う、おそらく日本最大級の検証を行っている。これまで、3 年で異動を繰り返すことで、地域の方との関係性が途切れてしまうことに悩み、かなり寂しかったり、悔しかったりして、継続的にやってみたいと思っていた。そこで静岡市主催の講座を受けた。講座の初日に、講師の先生から、「お前は社会を変えたいのか。それとも社会によさそうなことをしたいのか。どっちなんだ」と迫られて、これは本気でやっっていこうと思った。

静岡県の中山間地は 20 年間で人口が 4 割減っており、とりあえず人口減少を何とかするには移住を促進すればいい、そんな簡単な気持ちでいろいろ調べた。静岡市は 70 万人の政令指定都市なのに、中山間地空き家バンクは登録件数がわずか 4 件。いろいろ聞いたところ、空き家はいっぱいあるが貸してくれないし、実態は誰も知らない。そもそも、これが問題だった。そこで、空き家の見える化を行った。ある地区で、地元の方と一緒に、421 の建物全てマップ化したところ、3 割の 123 件が空き家だった。これはまずいということで、所有者との交渉から荷物の片づけまで、地元の人が取り組んだ結果、3 か月で物件が増え、750 人の地区に一年半の間に 6 家族 20 人が移住して、子供の数は 4 割も増えた。しかし、一生懸命、移住を促進しても人口は減ることに気づいた。そこで、人口減少に対応する仕組みを作るため、同じ講座の同期で、子育て支援を専門でしている池田さんと二人で「里山くらし LABO」という団体を立ち上げた。ミッションは中山間地域の持続可能なコミュニティ作り。「小規模多機能自治」という取り組みを参考に、私たちは地縁組織、いわゆる自治会に伴走している。課題解決型の支援であること、第三者であること、そして自費で活動しているということが特徴的だったことから、今年 2 月に、共同通信社などが主催する「第 8 回地域再生大賞」で特別賞を受賞した。

では、具体的に 4 つ紹介する。まず一つ目。自治会、地域活動はすごく大変。ある中山間地域で地域活動を一覧表にしてみた。すると「137 の行事と 150 の会議、616 の活動」で 1 年間に 903 の活動があるのがわかった。さらに、1,134 人で 14 の町内会と 30 の団体に役職が 316 もあった。そこで行事と組織の見直しをできるシステムを作り、一緒に見直しをやっている。取り組み始めて 3 年、ようやく形になり、自治会業務の負担がちょっと減ってきたようだ。また、行政に言われたから組織を作ったとか、行政に頼まれて参加したという話が多くあった。自治会は行政の下部組織なのか？と思い、静岡市に、どれくらい依頼しているのか尋ねてみたところ、年間 335 件依頼していることが分かり、市にも見直しをしてほしいと話をしている。

もう一つの事例。課題って何なのか、優先順位やどれだけ困っているかよく分からないので、全住民アンケートを推進している。1 世帯で 1 アンケートの場合、家長である高齢男子が答えてしまう。だから多様な住民意見を聞くために、中学生以上の全住民を対象にアンケートを取った。1,000 人ほど取り、回収率 9 割、めちゃくちゃ大変だったが、足りない活動ランキングを数値化した。足りない活動とは、移動支援、高齢者支援、耕作放棄地。これは大体予想通りだった。必要なのはイベントではなく生活支援なのだ、住民の皆さんはしっかり分かっている。報告会もやったら 120 名も集まった。来られないお母さんもいるので、報告書を作って全戸に配布した。これは全国の中間支援者にも提供している。

もう一つの事例。自治会の方と話をしていると、隣の地区でもお互いの情報を全然知らない。お互いの取り組みを学び合う場が必要と考え、静岡市の提案型事業に、担当課に根回しなく提案し、採択された。行政は、自治会とうまく付き合えないところがあり、僕らの方から市の自治会連合会の役員会に説明に行った。すると、大絶賛され、市の担当者も超積極的となり、初めての取り組みであった学び合う会は、会場が満員になるくらい参加してくれた。中山間地の地区が発表し、発表7分、付箋で質問したり、モグモグタイムを作ったりした。「20年後は俺生きてねえから」と言う自治会役員に本気になってもらうため、20年後も生きている高校生とママさんたちをちゃんと入れて、未来のことを考えてもらえるきっかけにした。閉会のあいさつで、市長や議長に次ぐような市の自治会連合会長が大絶賛し、締め言葉で勝手に来年もやるよと言ってくれたので、今年もやることになっている。また、900 超の自治町内会にも報告書を配布した。

今年度は、自治会役員を対象とした連続講座の講師にもなっている。企画運営も任されたので、かなりこだわり、やりたいこと、必要とされることをやる講座として企画した。「数える」「比べる」「調べる」「尋ねる」に徹底してほしいという講義をしている。とにかく徹底的に現状を把握するという地域アセスメントから入る、そういう講座にすることで、受講生のテーマというのがかなりリアルになってくる。たとえば「輪番制の弊害」とか、「歩いて行ける高齢者の居場所」とか、あとは「津波が 11メートルくるところの防災」とか本当に深刻な問題を受講生がいろいろ取り組んでいる。今回の講座で一番重要視しているのは、自分たちの地域の自治会関係者への報告会。市長へのプレゼンはあまり意味ないのでではなく、自らの自治会の人へのプレゼンを必須にしている。実は、市長にするより大変な部分もある。

最後に、僕ら活動している中で思うのは、「地域」って一体何なのかということ。物理的な範囲の話ではなく、住む人のコミュニティのことを「地域」と呼ぶのではないか。僕らの信念は、地域を変えることができるのは地域に住む人たちだけ。第三者とか行政は、応援はできるが、地域を変えるのは、地域の人しかできないと思っている。だからこそ僕らみたいな第三者が客観的な事実を提示することによって、地域の人動きやすくなるんじゃないかと思っているので、これからも引き続き活動していきたい。SNSでも情報発信しているので、良ければそちらも見たい。

司会（滋賀県湖南市長 谷畑英吾）：

最初に椎川理事長が言われた専門性を持った横串人材そのもの。

一つは自治会の仕事の多さ、私も数年前に組長となり、市役所から流れて来る書類がこんなに多いのかと。それを仕分けするだけでもう1時間半から2時間掛かって、それをまた各方面に配るということで、市役所内に言ったところちょっと減ったが、また最近増えているようだ。

それからアンケートは家長じゃなく、子どもや若い人取るべき。湖南市では若い人たちから提案をいただく取り組みをここ1年やっている。今年の提案のピカールは、中学生に100万円与えたら何を作ってくれるかという提案。中学生だってまちづくりのこと、将来のことを考えている。中学生関係ないということになるから、地域のことを考えなくなって、出て行く。自分が百万円どうやって使って地域のこたやろうかと考えたら、その先もこの地域の中にいてくれるんだと思って、来年度からそれを事業化しようかと思っている。地域に飛び出すとって、その飛び出す先の地域が一体何なのか、これから皆さんでも考えていただく必要がある。

【地域に飛び出す公務員アワード2018 表彰式】

プレゼンを行ったアワード受賞者には、表彰状を授与。副賞として、額入りの飛騨絵馬を贈呈。

「歴史まちづくり武賞」 高知県 筒井加奈様
「社会実験で学んでつなげま賞」 福井県福井市 西澤公太様
「ユニバーサルビーチを増やしま賞」 兵庫県神戸市 秋田大介様
「サンタで笑顔を増やしま賞」 北海道更別村 小野寺達弥様
「よりそいカ半端ないで賞」 静岡県 河村将雄様

今回アワードに応募いただいた全ての皆様に、賞を贈ることとし、当日来場されている応募者を紹介し、表彰状を授与。（来場されていない応募者には、後日表彰状を郵送）

「『夢・志事塾』による地域での人財創生」 三重県 山路栄一様
「アルカディオプロジェクト（南陽宣隊アルカディオ）」 山形県南陽市 HOPE 加藤由和様
「ここ de やる ZONE」「Code for AICHI」 愛知県岡崎市 中川光様
「東京の若者にふるさと鳥取の魅力を伝えたい！」 東京都 辻堅太郎様
「刀都の鬼才・小説家「風羅真」による日本刀のまちの地域活性化」 岐阜県関市 中島真也様

総括（一般財団法人 地域活性化センター 理事長 椎川忍）

本当に優れて素晴らしい活動。こういうものは世の中に知られてこないことが私の問題意識だった。1万人、10万人に1人悪い事をしている公務員がいると、新聞に大きく書かれる。本当に素晴らしい活動をしている人はたくさんいるのに、世の中には伝わりにくい。それをもっと世の中に出していこうというのがこのアワードの趣旨だと思う。

そしてなぜ公務員批判が起こるのかをみんなで考えた方がいい。やっぱり公務員嫌いな人、公務員はあっち側について、俺たちのことを何かこう上から目線で見てるという感覚がそうさせていると私は思う。だから地域に出て行って、大きな成果を最初から上げなくても、仲間になれば仲間のことを悪く言う人、家族のことを悪く言う人ってあまりいない。そういう風になりましょうというのがこの飛び出す公務員の趣旨だと思うので、大いにやってもらったらいいと思う。